

別添資料4 「『経済社会における会計基盤の全体構造』科目概要」(2005年度シラバスより抜粋)

<p>科目名</p>	<p>経済社会における会計基盤の全体構造 (グローバル経済における「会計」の思考と行動)</p>
<p>授業内容</p>	<p>自由主義経済のもとでは資本市場は金融面において経済社会を支えるインフラ(社会的基盤)であって、資金の調達、資産の運用・形成の場として機能している。IT技術の発達により情報は瞬時に国境を越える。経済のグローバル化の影響をもっとも強く受けるのがこの資本市場である。資本市場における主要なプレーヤーは世界各国の年金基金・投資信託・生命保険などの機関投資家であって、かれらは「合理的な投資家」(prudent investor)として、企業内容の透明性、財務情報の投資情報としての信頼性と有用性を必要としている。</p> <p>財貨及びサービスの供給者として経済社会の実態面を支える企業の多くは、資本市場からの調達資金に依存しており、資金調達のために開示される財務情報は、主として投資の意思決定に資するべく、透明性、信頼性、及び有用性の高さが求められている。</p> <p>透明性、有用性の概念は経済社会における実践規範としての制度会計と密接に結びついている。そして、信頼性なる概念も、証券取引法及び商法その他の法律に規定する外部監査制度を介して、やはり、制度会計と密接に結びついている。さらに、企業行動が、社会的な法規範、例えば、証券取引法(一例を挙げれば、有価証券虚偽記載の判定)、独占禁止法(一例を挙げれば、市場占有率の測定)、商法(一例を挙げれば、違法配当の認定)その他の法律に抵触するか否かの判定も、制度会計と密接に結びついている。これら制度会計に関連する規範を総称して、ここでは「会計」という。だから、会計的思考とは、経済取引を単に、二元的・貨幣的に捉えるだけでなく、企業組織についても、経営責任の所在を明確にして、業務の品質を確保するための諸方策を講じようとする職能的な思考である。そして「会計」をになう人材が、高い意識を持って情報の透明性、信頼性を確保しないとすれば、やはり、情報の有用性は担保されない。</p> <p>本講義では、経済社会における会計基盤の全体構造を資本市場における開示情報の有用性、透明性、信頼性との関連で明らかにしたい。</p>